

伊能忠敬没後、高橋景保の下役や忠敬の内弟子たちが中心となって最終版伊能図となる「大日本沿海輿地全図」を完成させ、一八二一（文政四）年七月十日に景保と忠敬の孫忠誨によって幕府に上呈された。忠敬の死が公表されたのは、その年の九月である。「大日本沿海輿地全図」は、大図二百十四枚、中図八枚、小図三枚の三種類からなる。大図は、二百十四枚の地図を東西・南北に接合する切図形式をとり、中図・小図も同様である。接合箇所には、合印となる色鮮やかな半円形のコンパスローズ（方位記号）が複数描かれ、接合すると円形を呈した。

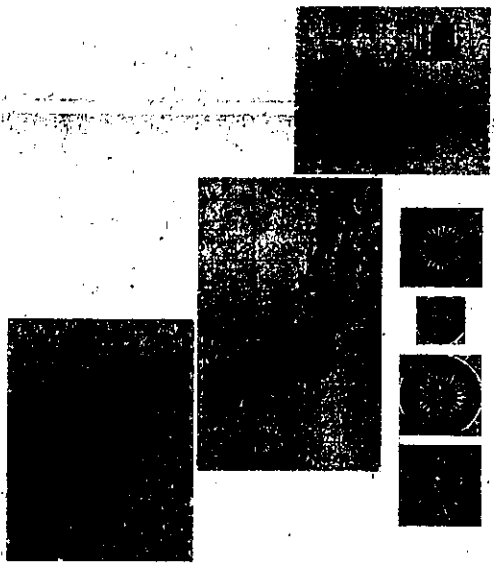
### 「大日本沿海輿地全図」の完成

この幕府上皇本は七三（明治六）年の皇城火災で焼失し、そのため明治政府が買い上げた伊能家副本も一九二三（大正十二）年の関東大震災で失われた。唯一遺るのは、地図三組と

一緒に提出された測量記録「輿地実測録」十四巻（国立公文書館蔵）だけである。『輿地実測録』（一八七〇年に『大日本沿海実測録』として刊行）には、冒頭に高橋景保・伊能忠敬の序文、測量法や作図法に関する「凡例」や地図記号、目次が掲載され、以下、全国約七千八百地点についての距離や緯度の測定値が続く。景保の序文では、長久保赤水作図の「改正日本輿地路程全図」に言及している。

このように、幕府に上呈された伊能図原本は失われたものの、忠敬らは測量後には作図作業に従事していた、伊能忠敬記念館（千葉県香取市佐原）には下図三百九十九点、地図（稿本）百二十三点が所蔵されている。また、日本東半部「沿海地図」や「大日本沿海輿地全図」の完成時には、老中や若年寄といった幕府重臣たちや天文方の高橋景保らにも、上皇図の仕立てに近い針穴本の中図・小図が謹呈された。他にも、蜂須賀家や松浦家、毛利家などの大名の求めに応じて秀麗な地図が献上されている。さらに幕末には、海防用の実用地図や海図として海岸線が詳細な伊能図が利用されたほか、明治政府が近代地図整備のために伊能図を模写している。

（ひらい・しょうじ）徳島大名普教授



「実測輿地図」伊能小図3舗とコンパスローズ=ゼンリンミュージアム蔵、蝦夷地（151.9×160.5㍎）、東日本（256.6㍎×161.0㍎）、西日本（203.7㍎×160.0㍎）